

## 登山を学ぶ場所

日頃会いたいと思いつつ、なかなか会えない方から届く年賀状はうれしいもの。添え書きされている近況を、フムフムと思いつつ読む。これがうれしい。「初孫誕生」とあって、孫を抱いている古い山仲間の写真は年賀にふさわしくめでたい。大学ワンダーフォーゲル部の顧問をやっている知人からの賀状の片隅に、「新入部員が入らず、活動を休止しています」とあって、こちらにはショックをうけた。数年前の添え書きには、「新入生数人が入部、倶楽部が活性化」とあって、喜んでいたので・・・。

中高年登山ブームが一段落し、山ガール・山スカブーム到来で、若い登山者の増加も実感していたのに、と思いつつ、集団化を嫌う傾向に気づかされた。以前にも書いたが、最たるものは一人用テントである。単独でのテント山行ならいざ知らず、グループ山行でも各自が一人用を携行する。

数年前、アルプス入門の登山教室として好みのコース、鳳凰三山を計画した。平均年齢が七十歳になるパーティなので、小屋泊まりである。新宿発七時の特急スーパーあずさ1号で葦崎、葦崎からタクシーで御座石温泉まで入る。登山口から燕頭山越えは、アルプス入門にふさわしい急登だ。この日は鳳凰小屋泊。2日目は賽の河原に登って地蔵岳にタッチ、観音岳に立ち、薬師岳を越えて夜叉神峠まで縦走、峠小屋泊。3日目、のんびり峠登山口まで下り、タクシーで甲府に戻る。

鳳凰小屋に上がったのは午後4時頃、びっくりした。テント場が満タンで、一張の余地もない。グループ山行でも、寝るときは一人にしてとばかり全員が一人用テントを携行、それくらいに個人主義が主張される時代になったのかと、ため息つくのはぼく一人ではあるまい。ため息をついても、山岳部や山岳会に新人は入ってこない。いや、新人が入ってこなくてもこちらは困らないのだ。人がいなくなって山岳会が継続しないなら、それはそれでいいと思っている。ぼくが心配するのは彼らの方だ。山岳会に入らず、どこで登山の勉強をするのだろうか。

山岳遭難事故が年々増加している。最も多いのは「道迷い」だという。ぼくらが現役の頃、遭難原因のトップは「転倒・滑落」だった。

集会の席上で山行計画を出すと、リーダー会員が目を通し、「今年は雪が早いから、ピッケル・アイゼンは持っていけ」とか「あそこは一か所ヤバイとこあるから、ロープ持っていけ」とか、問題点をアドバイスしてくれた。雪が早い遅いかは、その日、その時でないと分からないことだ。

山岳会に入らない彼らの勉強の場は、ネットだという。ネット上の文字によるアドバイスより、山岳会の先輩の肉声によるアドバイスの方が実効が大きいことは自明であろう。昨今の遭難で最も多いのが「道迷い」というのは、勉強の場がネットだからというのがぼくの持論である。